今回の風景作品について

これまでの展示でも風景といえる作品は各個展で数点ずつではあるが発表してきた。
都度、その展示のコンセプトに合わせて描いてきたが、基本的には自分に関わる風景、生活圏で見てきた風景を描いている。
今回もその部分は変わりない。ただ今回はこれまでの記憶や自分の過ごしてきた時間を強く取り入れている。

各作品には枠取りがしてある。これは昭和期に見られる写真の白枠をイメージしている。現在は技術も進歩し、白枠のある写真はあまり見られない。ただ最近はこのノスタルジックな形状をあえて取り入れている写真もあるようだ。
その気持ちもわかる。当然枠がない方が写真としての情報量は増えるし見やすいかもしれない。しかしながら額装したような枠取りと少しあせた色味は味わい深く、記憶に残る。
去年度、仕事で昔の写真を扱ったワークショップに関わった。川崎市の写真コンクールの出品作を扱った対話型鑑賞の形式での取り組みであった。川崎市のコンクールなので当然川崎市の風景や生活が写し取られていたのだが、それを見て年配の鑑賞者は自分が川崎に住んでいるいないに関わらず、懐かしさを感じたり、記憶を蘇らせたりしていた。リアルタイムでその風景を見ていない層の鑑賞者も体験はしていないけど、懐かしい気持ちを持ったり、今はない発見をしたりと楽しんでいた。
この状況を見たときに、自分の体感した風景が映し出されていなくとも、なんだかわからない情景だったとしても、何かを見出して懐かしさを感じる力が写真にはあり、おそらく絵画にもその効果は反映されそうだなと感じたのだ。
なので今回はそういった昔の写真の形状を使って制作している。

また、制作方法としてはこれまでも用いていた絵具の層を幾層も重ね、やすりと磨きで平滑にする方法で制作している。
こうすることで今見ている風景が記憶のレイヤーの積み重ねによって成り立っているという考えとリンクさせている。研ぎだすことで下の層が見え隠れして、本来あるべき形が少し変わって見えたり、新しい形を生み出したりしている。
記憶の曖昧さ、それによって生み出される曖昧な輪郭を表現したかった。

「波」をモチーフにした作品のタイトルにも触れておきたい。
アルファベットと数字の羅列で構成されたタイトルだが、意味としてはなんてことはない。モチーフとなった場所を作者が認識できる頭文字(e は江ノ島の「江」から、など)をアルファベット。数字はモチーフになっている写真を撮影した日付にしようとおもったのだが並べてみるとあまりに日付でひねりがないのでおおよその場所の緯度経度の数字を足したものになっている。なので自分でも数字は覚えられない、意味のない数字にはなっている。ただその場所、作品を構成する要素を盛り込んではいる。

財田翔悟